

with コロナ時代における学生宿泊型教育体験活動の試み

－ 2021 年度, 2022 年度「リーダー村」での活動より－

高橋 平徳¹⁾, 日野 克博²⁾, 徳田 義実³⁾, 二宮 啓³⁾, 高木 啓吾³⁾

1) 愛媛大学教育・学生支援機構教職総合センター

2) 愛媛大学教育学部

3) 国立大洲青少年交流の家

A Study on the Trial of Student Accommodation Type Educational Experience Activities in the With Corona Era : Reseach on Project in 2021 and 2022

Yoshinori TAKAHASHI¹⁾, Katsuhiko HINO²⁾
Yoshimi TOKUDA³⁾, Hiromu NINOMIYA³⁾, Keigo TAKAGI³⁾

1) Center for Teacher Education, Institute for Education and Student Support, Ehime University

2) Graduate School of Education, Ehime University

3) National OZU Youth Friendship Center

1. はじめに：本稿の背景と目的

2019 年末に確認された新型コロナウイルス感染症は瞬く間に全世界に拡大し、日本においても緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が出され、学校の休校、テレワークの推進、イベント自粛、不要不急の外出を控える等、社会、経済に大きな影響を与え続けている。

愛媛大学においても、新型コロナウイルス感染拡大防止への観点から学生の学習活動を大きく制限せざるを得なかった。2021 年度後学期からは、「これまでの「活動を制限して、感染を防止する」という視点から、「できるだけ日常に近い活動を行いつつ、感染を防止する」という視点に変更」された（学長メッセージ『新型コロナウイルスによる感染症に対する愛媛大学の対応－これまで1年半の対応と、コロナウイルスとの共存に向けた新たな対応へ－』（2021 年 9 月 30 日））。

第3クォーター期間では遠隔授業を基本としながらも、徹底した感染防御対策のもと対面授業も可能な限り開講することが、第4クォーターからは徹底した感染防御対策のもと対面授業を実施し、キャンパス内での学生の学習機会を確保することが図られた。2022 年度前学期からは、感

染防御対策を徹底し、原則対面授業を実施することとなり、実習や施設利用、部活動やサークル活動も徐々に解禁され、学生の学習活動に日常が取り戻されつつある。

感染防御対策やワクチン接種が行き渡り、感染状況は少し落ち着いた状況であるとも言えるが（厚生労働省ウェブサイト新型コロナウイルス感染症の国内発生動向：2022 年 10 月 3 日掲載分 <https://www.mhlw.go.jp/content/10906000/000996766.pdf>）、現在でもコロナ以前の生活までには回復できておらず、また今後新たな変異株の発生など予断は許されない段階である。

本稿の目的は、こうした新型コロナウイルスと共存していかざるを得ない with コロナ時代、ニューノーマルと言われる時代において、感染防御対策を徹底しながら実施した、2021 年度と 2022 年度の「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村（以下リーダー村）」の取り組みを紹介しつつ、その成果を明らかにしていくことで、with コロナ時代における学生宿泊型教育体験活動への視点を提示できればと思う。

2. リーダー村の取り組み

2-1. リーダー村の概要

リーダー村は2007年より国立大洲青少年交流の家と愛媛大学が連携し実施している宿泊型教育体験活動である。

リーダー村では、小学4から6年生対象の宿泊型体験活動である「子どもむかし生活体験村」(以下体験村)での子どもたちの体験活動を支援促すリーダーとして活動する。

体験村で子どもたちと活動する前準備として、アイスブレイクや野外炊飯、カヌー漕艇、うちわ作成技術、救急救命方法、地域の自然・歴史・文化などについて学生自身が体験を通して学んでおく(写真1, 写真3)。事前活動での学びを活かし、学生主体で子どもたちに伝えるための体験活動を計画・準備・運営していく(写真2, 写真4)。これが「学び伝えるリーダー村」と命名している理由である。

なお、共通教育高年次教養科目として、また準正課教育的な地域連携実習の一環として、全学部、全学年の教員志望学生に対して開講している。また愛媛大学のみでなく、松山東雲女子大学人文科学部心理子ども学科学生の参加も認めており、大学、学部、学科、学年を超え、専門性が異なる学生同士の学びの機会としている。」



写真1 うちわの作り方を学んでおく



写真2 うちわの作り方を伝える



写真3 博物館学芸員から地域の歴史・文化を学ぶ



写真4 ウォークラリーで歴史・文化を伝える

さらに、複数回にわたるリーダー村への参加も認めており、2回目の場合は初参加の学生全体を一步下げてサポートする上級クラス、3回目以上ではプログラム全体をマネジメントする発展クラスとして、ステップアップしながら学生の多方面の資質能力の育成を図っている。

2-2. リーダー村の内容

2019年度以前は、子ども対象の体験村は3泊4日、リーダー村は事前活動2泊3日を含んで計6泊7日行っていた。活動場所は、西予市山間地域の野村町惣川にある四国最大級の茅葺木造民家「土居家」を中心に活動していた。

2020年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策の観点からやむなく中止した。

2021年度は感染状況が落ち着いていた11月、小学生対象の体験村を11月27から28日の1泊2日に短縮し、大学生の事前活動を11月20から21日、体験村を27から28日に日程を分散して実施した(表1)。参加学生は10名であった(教育学部4年生1名、医学部看護学科4年生5名、松山東雲女子大学人文科学部心理子ども学科2年生4名)。発展クラスとして過去参加経験のある教職大学院生1名が、またOBの採用3年目の小学校教員が加わり活動を行った。

表1 2021年度リーダー村の内容

1日目(11/20)	2日目(11/21)	22-26	3日目(11/27)	4日目(11/28)
開村式	安全管理 (普通救命講習1)	Zoom を活用 したプ ログラ ム立案 と準備	子どもむかし生活体験村の運営、立案プログラムの実施	
アイスブレイク	昔遊び体験		子どもむかし生活体験村(小学生20名)	
自然体験活動	村の掟作成		アイスブレイク	自然体験活動
歴史体験活動 (大洲城、内子町)	プログラム立案		歴史体験活動	思い出発表準備
講義 (教師に求められるもの)	生活体験村準備		昔遊び体験	思い出発表会
キャンドルサービス実習		班の決まり、係決め	キャンドルサービス	
リフレクション・タイム			リフレクション・タイム	



写真5 リフレクションの様子

表2 2022年度リーダー村の内容

1日目(8/16)	2日目(8/17)	3日目(8/18)	4日目(8/19)	5日目(8/20)	6日目(8/21)
開村式	カヌー実習	村の掟作成	子どもむかし生活体験村の運営、立案プログラムの実施		
アイスブレイク	歴史体験活動 (大洲城、市立博物館)	プログラム立案	子どもむかし生活体験村(小学生19名)		
安全管理 (普通救命講習1)	講義 (教師に求められるもの)	生活体験村準備	アイスブレイク	カヌー	思い出発表会
うちわ作り実習			班の決まり、係決め	歴史体験活動	開村式
野外炊飯実習	キャンドルサービス実習		うちわ作り	キャンドルサービス	
			野外炊飯	思い出発表準備	
リフレクション・タイム					

2022年度については、体験村を8月19から21日の2泊3日にし、リーダー村を8月16から21日の5泊6日の集中活動で実施した(表2)。参加学生は15名であった(教育学部1年生8名、医学部看護学科3年生5名、松山東雲女子大学人文科学部心理子ども学科1年生2名。OBの採用3年目の小学校教員が活動に加わった。

リーダー村では、子ども4名に対し学生3名(2021年度は2名)の生活班(全5班)を作り、班単位で活動する。2泊3日班で活動することを通して学生は子どもたちとの関わり方を学んでいく。

また、生活班とは別に、それぞれのプログラムの担当となる班を2から4名で作成し、企画を立案・実施する(アイスブレイク担当班、うちわ作り担当班、キャンドルサービス担当班、歴史体験活動担当班、思い出発表会班など)。このことで、体験活動プログラムを計画・実践していく能力を身につけていくことを目指している。

リーダー村では、毎日40分程度の「リフレクション・タイム」で、生活班、企画班ごとに、子どもたちとの関わり方や、企画の成果や課題などについて省察し、学生の体験からの学びの質を高めている(写真5)。

2-3. 新型コロナウイルス感染防御対策

with コロナ時代、ニューノーマルと言われる時代において、学生宿泊型教育体験活動には、感染防御対策を徹底することが不可欠である。以下リーダー村で行った工夫や感染防御対策について触れておきたい。

2-3-1. 活動内容の精選による日程の短縮

まずは日程を短縮した。すでに述べたように、2019年度以前は子ども対象の体験村が3泊4日で、それに事前活動を加えリーダー村を6泊7日としていたが、2020年度の休止をはさんで、感染リスクを抑えることと長時間体験活動できることを最大限検討し、2021年度は子ども対象の体験村を1泊2日に設定した。そして、学生の事前活動は感染リスクを抑えるために体験村に連続させず、1週前の1泊2日として実施した(表1)。

2022年度は体験村の活動内容を精選し2泊3日とした。計画段階では感染状況が非常に落ち着いており、新型コロナウイルス感染症に対するガイドラインに従うことで最大限の感染防御対策が取れると判断して、学生の事前活動も連続させ計5泊6日と計画し実施した(表2)。

2-3-2. 宿泊場所、活動場所の限定

宿泊場所、活動場所についても、2019年以前は国立大洲青少年交流の家と、西予市野村町惣川の「土居家」を行き来しつつ宿泊・活動していたが、宿泊場所を国立大洲青少年交流の家とし、活動場所も大洲周辺地域とした。このことで感染防御対策の取りやすさを高めた。また移動時間の縮減も生んで日程の短縮につながった。

ただ、「土居家」は四国最大級の茅葺木造民家であり、伊予の伝承文化、歴史を身をもって体感できる貴重な建築物である。リーダー村の象徴として、過去の参加学生に認識され、活動報告や参加者募集の写真で活用されてきたものであるため、来年度以降再度活動場所とできるよう検討・調整を進めていきたい。

2-3-3. 2週間前からの健康観察の実施

リーダー村に備え、学生及び教員は2週間前からの健康観察を行い体温や備考を記録し、それを愛媛大学教員と国立大洲青少年交流の家に提出するように求めた。体調確認はもちろんであるが、感染リスクの高い行動を避け、感染防御行動を取る自覚を促す目的で行ったが、学生も誠心誠意応えてくれて無事初日を迎えることができた。

2-3-4. 大学マイクロバスの活用

国立大洲青少年交流の家への往復移動についても、2019年度以前は、学生各自で公共交通機関等を利用し現地集合・解散を行っていた。公共交通機関の利用は制限されていなかったが、外部との接触をできる限り減少させるため、2020年度から大学のマイクロバスを活用した。事前の健康観察を十分行い、体調確認と検温、手指消毒を行ったもの同士が、座席制限され換気された車内で距離をとりながら乗車するため感染リスクは大きく減少させることができる。愛媛大学城北キャンパス正門、松山東雲女子大学正門、愛媛大学附属病院を経由して国立大洲青少年交流の家へと向かうため、感染リスクと同時に学生の移動の負担も軽減できるため、今後も大学マイクロバスを活用していきたい。

2-3-5. ICTの活用

2019年度以前は、城北キャンパスで対面で行っていた事前説明会をZoomを活用して実施するようにした。

また「現代の教育」、「リーダーについて」、「青少年教育施設の役割と体験学習」といったリーダー村の初日に対面で行っていた合計3時間の講義についても、遠隔非同期型の事前学習として実施するようにし、日程の短縮につなげた。愛媛大学と松山東雲女子大学ではLMS（ラーニング・マネジメント・システム）のプラットフォームが違うため、Googleドライブを活用した。学生はGoogleドライブに掲載された講義動画を視聴し、メールにて教員にレポートを提出するという事前学習を行った。

ICTの活用についてはとくに、2021年度の学生はZoomを活用して話し合いを行う機会が多くあった。事前活動の1日目の途中で他の実習を控えている学生が帰宅せざるを得なかったが、プログラム立案と準備のための話し合いや、その日と翌日のリフレクションをZoomを活用して行った（写真6）。また、事前活動から体験村までの期間で完成されていないプログラムの立案と準備のための話し合いをZoomを活用して自発的にOBを交え行っていた（表2）。

このように遠隔非同期型の事前学習でのGoogleドライブや、事前説明会や話し合いでのZoomといったICTを活用することで、対面での接触を減らしている。感染リスクを低減させながら、日程の短縮をカバーし、十分な事前学習や話し合いができていく。学生のICT活用能力の向上にもつながるため、今後もICTを活用していきたい。



写真6 Zoomを活用した話し合いの様子

2-3-6. 新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインの遵守

そして活動の中では、国及び国立青少年教育振興機構の通知・ガイドライン等に従い作成された、国立大洲青少年交流の家の新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドライン（<https://ozu.niye.go.jp/assets/docs/ji220317.pdf>）を遵守し行動した。手洗い・アルコール消毒の徹底、マスクの着用、三密の回避、換気、共有箇所の消毒等の基本的な感染対策とともに、朝夕の検温と体調確認を行った。

食事は黙食にて行い、入浴の際にも距離を取り黙浴を求めた。宿泊に関しては特に広い部屋で2段ベッドを互い違いに利用して距離を取り睡眠するようにし、マスクを外している際の感染リスクをできる限り減少させた。

食事・入浴・宿泊時の会話はこうした宿泊型活動において参加者同士の交流を深める重要な機会ではあるが、マスクを外している際の会話は非常に感染リスクの高い行動であるので、会話をする際にはマスクの正しい着用を心がけてもらった。

また、万が一体調不良や感染が疑われる状況となった場合に備え、愛媛大学総合健康センターのガイドラインを確認しそれに従って対応することを確認した。

以上述べてきた工夫や感染防御対策を行うことで、2021年度、2022年度ともに、体調不良者や新型コロナウイルス感染者を発生させることなく、無事、全日程を終えることができた。withコロナ時代であっても、感染防御対策を十分に行い、できる限りの宿泊型教育体験活動をおこなっていききたい。

3. リーダー村の成果

さて、こうした状況の中で実施してきたリーダー村であるが、その成果について検討していく。

3-1. 研究の方法

3-1-1. 研究対象と調査方法

研究方法として、2021年度及び2022年度参加学生に対

する質問紙を用いた記名式の事前事後アンケート調査を実施した。2021年は10名、2022年は15名である。調査項目は表3、表4の通りである（3-1-2にて項目作成意図を述べる）。事前調査は開村式、事後調査は閉村式の際に記入を依頼した。

また、参加学生に対して、事後アンケートと同時に、「リーダー村全体を通して成長を実感すること」についての自由記述を依頼した。

そして、2022年9月29日、10月3日に、2022年度参加の教育学部1年生4名に対して対面の30分から40分程度のインタビューを行った。また、2022年9月29日に、2021年度参加の教育学部卒業生（現職教員）に対してZoomを活用した30分程度のインタビューを行った。

インタビューの内容は、「リーダー村から少し時間が経って成長を実感していること」や、「そう思える具体的なエピソード」等であり、協力者に許可を得て録音し、逐語録を作成した。

3-1-2. 事前事後アンケートの調査項目

リーダー村の学習効果を測定するため、「これからの教員に求められる資質能力」として想定した項目について「とてもそう思う5、そう思う4、どちらともいえない3、そう思わない2、全くそう思わない1」の5段階評価で回答を求めた（表3、表4）。

これらの項目は、2021年度段階では、リーダー村の目的、本学教職課程ディプロマ・ポリシーや、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（中央教育審議会、2015）、そして教職課程コアカリキュラム（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会、2017）での、自律的に学ぶ姿勢、求められる資質能力を生涯にわたって高めていける力、情報の適切な収集・選択・活用する能力、特別な支援を必要とする児童生徒に対応できる力量、「チーム学校」の考えの下多様な専門性を持つ人材と効果的に連携協働する力といった言及を踏まえ、当時の研究者間で検討し7項目で作成したものである（高橋・日野・山崎、2017）。

項目3は「チーム学校」を支える資質能力、項目4は「学び続ける教師」としての資質能力を想定し、項目5は「カリキュラム・マネジメント」のための資質能力として想定している。そして、項目6、7に関しては、「チーム学校」及び「カリキュラム・マネジメント」の両方に関わる資質能力として想定している。

また、2022年度では、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（中央教育審議会、2021）での、個別最適な学びや協働的な学びを行うための、子ども一人一人の学びを最大限に引き出す力、子どもの主体的な学びを支援する伴走者としての能力、ICTの活用能力、地域住民との連携協働といった言及を踏まえ、今回

の研究者間で検討を重ね、5項目を追加し、合計12項目とした。

項目9は「一人一人の学びを最大限に引き出す力」に大きく重なる項目であり、項目11は「ICT活用能力」と重なる項目として想定している。

3-1-3. 分析方法

事前事後アンケートは、各項目についてのリーダー村開始段階（事前）と終了段階（事後）の平均点及び標準偏差を算出する。またリーダー村事前事後の得点の有意水準を検討するため対応のあるt検定を行う。そして、各項目の事前事後の効果量（ r ）を算出する。

自由記述及びインタビュー調査での逐語録といった質的データは、回答の意味内容を読み取り、事前事後アンケートの各質問項目に沿って分類し代表的なものを抜粋した。以上の量的、質的データの検討によってリーダー村の成果を明らかにしていく。

3-1-4. 倫理的配慮

なお、本研究は、愛媛大学教育・学生支援機構研究倫理委員会の承認を得て実施されている（受付番号22-001）。2021年度の事前事後アンケートと自由記述については、対象者の研究への参加は任意で、他の科目も含めた単位認定及び成績評価とは一切関係がないこと、研究への不参加による不利益がないこと、研究参加への中止を研究者に対していつでも通告し中止できること、データの管理を厳重に行うこと、学会や論文で研究成果を公表すること等を口頭と文書で説明し、研究協力への同意を得て実施している。

3-2. 結果と考察

3-2-1. 2021年度リーダー村参加学生への事前事後質問紙調査の結果

2021年度リーダー村について、事前事後質問紙調査を完遂した対象者は10名で、調査票の回収率は100%であった。内訳は4年生6名：教育学部1名、医学部看護学科5名、2年生4名：全員松山東雲女子大学人文科学部心理子ども学科であった。4年生がやや多い傾向である。

各項目の平均値と標準偏差は表3の通りである。項目「2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる」を除き、事前と事後で有意差があり（ $p<0.05$ ）、平均値が増加している。

効果量（ r ）の値については、項目2については $r=0.36$ の効果量中で、その他の項目については0.67以上の効果量大を示していた（水本・竹内、2008）。

とくに、項目「6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる」（ $r=0.91$ ）、項目「4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる」（ $r=0.86$ ）、項目「3. チームとしての

表3 2021年度参加学生への事前事後質問紙調査の結果

項 目	カテゴリ	Mean ± SD	対応のある t検定	効果量 (r)
1. 子どもの育成を支援する教育の指導者に求められる役割について、具体的に述べることができる	事前 事後	3.2 ± 0.6 3.8 ± 0.9	$p=.024$	$r= 0.67$
2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる	事前 事後	3.9 ± 0.5 4.2 ± 0.7	$p=.279$	$r= 0.36$
3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる	事前 事後	3.5 ± 0.9 4.3 ± 0.6	$p=.003$	$r= 0.80$
4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる	事前 事後	3.6 ± 0.8 4.5 ± 0.5	$p=.001$	$r= 0.86$
5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる	事前 事後	2.9 ± 0.8 4.0 ± 0.8	$p=.007$	$r = 0.76$
6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる	事前 事後	3.8 ± 0.4 4.8 ± 0.4	$p=.000$	$r= 0.91$
7. 不明な点や困ったことがあれば、企画者（地域の方々や、職員、教員）に適切に質問や相談ができる	事前 事後	4.1 ± 0.5 4.8 ± 0.4	$p=.010$	$r= 0.74$

表4 2022年度参加学生への事前事後質問紙調査の結果

項 目	カテゴリ	Mean ± SD	対応のある t検定	効果量 (r)
1. 子どもの育成を支援する教育の指導者に求められる役割について、具体的に述べることができる	事前 事後	3.3 ± 0.6 4.3 ± 0.6	$p=.000$	$r=0.88$
2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる	事前 事後	3.7 ± 0.7 4.7 ± 0.4	$p=.000$	$r= 0.81$
3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる	事前 事後	3.2 ± 0.7 4.4 ± 0.5	$p=.000$	$r= 0.88$
4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる	事前 事後	3.6 ± 0.6 4.8 ± 0.5	$p=.000$	$r= 0.88$
5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる	事前 事後	3.2 ± 0.7 4.7 ± 0.4	$p=.000$	$v= 0.89$
6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる	事前 事後	4.1 ± 0.5 4.9 ± 0.3	$p=.000$	$r= 0.86$
7. 不明な点や困ったことがあれば、企画者（地域の方々や、職員、教員）に適切に質問や相談ができる	事前 事後	4.3 ± 0.4 4.8 ± 0.4	$p=.006$	$r= 0.65$
8. 子どもの成長を支援するための体験活動を安全かつ効果的に指導することができる	事前 事後	3.3 ± 0.8 4.7 ± 0.5	$p=.000$	$r= 0.87$
9. 子どもの興味・関心・意欲を意識して、子ども一人一人の活動を支援することができる	事前 事後	3.9 ± 0.5 4.9 ± 0.3	$p=.000$	$r= 0.89$
10. 状況を判断しながら、臨機応変に対応することができる	事前 事後	3.5 ± 0.6 4.7 ± 0.4	$p=.000$	$r= 0.89$
11. 情報モラルを守り、必要に応じてICTを活用することができる	事前 事後	3.4 ± 0.8 4.1 ± 0.7	$p=.003$	$r= 0.69$
12. 施設の職員や地域の人々から学んだことを活かしてプログラムを企画することができる	事前 事後	3.4 ± 0.6 4.7 ± 0.4	$p=.000$	$r= 0.86$

学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる」($r=0.80$)が高い効果量を示している。

3-2-2. 2021年度リーダー村の成果の考察

以下、事前事後調査結果をもとに、自由記述とインタビューでの言及も押さえながら2021年度リーダー村の成果を考察していく。

なお、斜体のものが自由記述での記述内容で、「」付きの斜体で示しているものがインタビューでの言及内容である。内容や文脈を変換させることなく筆者が要約している。内容の最後に示す氏名は本名と関係のないアルファベットの仮名とし、学部学年を教育学部1年生なら教1、松山東雲女子大学人文科学部心理子ども学科2年生ならば子2と略している。また文章内のアンダーラインは、当該内容に関係が深いと考えられる箇所に筆者が引いたものである。

項目2を除き、事前と事後で有意差があり、平均値が増加し、効果量も大であったことは、1泊2日を2週に分けて実施した緊急的なプログラムでありながら十分学生の資質能力の育成に貢献できていると捉えることができる。

とくに効果量の高かった項目「6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる」($r=0.91$)については以下の記述があった。目的達成のためにチームで動き一人で抱え込まず協力することや、協調するためにできることを見つけ動くという意識が学生に生まれていることがわかる。

- ・ 予測できないことや急に変更になったことへの対応や大人数での活動を一人で運営することはできない。一人でやろうとせず相談する協力する。学校でも必ずチームで動き一人で抱え込まない。(Pさん、看4)
- ・ メンバーで同じことをするのではなく分担したりして自分にできることを見つけ自ら動くということが大事だと学んだ(Oさん、子2)

ついで効果量の高かった項目「4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる」($r=0.86$)についても、以下の記述があり、リフレクションの重要性が強く認識されていることがわかる。

- ・ 食事の時に子どもに挨拶してもらった係を3回担当し、その都度自分でリフレクションしていました。回を増すごとにより良いものにできたと思います。やはりしたままで終わるのではなく振り返りをすることが次につながる。(Qさん、看4)

項目「3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる」

については、以下のように、現在教員となっている参加学生から、学校現場でリーダー村での学びが生きていていると感じているという言及があった。

- ・ 「リーダー村では学生同士で一つになっていきなり一週間ぐらいで仲良くなって企画を考えていくじゃないですか。大学の時にリーダー村でそういうことを経験しておくと、やっぱり集団宿泊学習とか地域と連携しながら行う行事もあるんですけど、そういう時に自分の中に経験したものがあるので、それを持って会議とかに参加できるので貢献しやすいと思っています。それに学校現場でも色々な年代の人がいる中で、うまくコミュニケーションを取って、自分が初任者なのでわからない事も沢山あって、そういう時にどうしたらいいかを聞きに行ったり、こういう案もいいんじゃないですかと提案できたり、学校全体でチームとして動く時に、リーダー村でいるんな人と連携できたことがすごく役立ってるって思っています。」(Sさん、教4)

項目「2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる」については、事前事後で平均値は増加していたが有意差が見られず、効果量についても中であつた。しかし学生の自由記述を確認してみると、以下のように具体的な気づきが数多く示されている。

- ・ 個に応じたコミュニケーション方法を学んだ。距離感の縮め方は子どもによって異なることを強く実感した。その子の特性を把握し関わるのが大切。保健室へ来る子どもへの対応をする時、養護教員が安心できる居場所となるためには、子どもに応じたコミュニケーションをしていきたい。(Mさん、看4)
- ・ 子どもに任せてみるタイミングを作る。なんでも手を貸したくなるが子どもが一人になったことで自分でできるようになることもある。手助けが必要な時と子供を見守って自分たちに考えさせる時を見極めようと意識ができるようになった。今後見極める意識だけでなく力を身につけたい。判断や子どもにまかせるという決断にも勇気がある。(Pさん、看4)
- ・ 子どもとの関わりとしては、見知らぬ人との活動を楽しむするために子どもの気持ちをほぐしてあげることが必要で、そこから活動をして行く中で班の子供との絆を深めることができた。リーダーとしてすべての子どもと平等に関わり、子どもの性格や興味のあることを理解しておくことで、その後に適した関わりをすることが必要だと学んだ。班の中でも積極的に話し、何でも自分がしたいというような子や控えめで我慢するような子もいる。そのような子と平等に接し、楽しんでもらうためには

リーダーの声掛けや関わり方がとても重要だと感じた
(Rさん, 看4)

ただ, こうした気づきがあっても, 学生たちは子どもたちと「適切なコミュニケーションをとることができる」と思えるまでには至っていなかったのかもしれない。そうした意識が伺える記述もあった。

・ 一日目はお互い緊張して, ご飯ではあまり仲良くなれなかったが, どんどん仲が深まる。(Oさん, 子2)

こうした記述からは, 子どもとうまくコミュニケーションをとる力が身についたと思えるには, もう少し子どもと関わり, 気づきを実践につなげられるための時間が必要であることが示唆される。

以上, 2021年度リーダー村の成果を事前事後調査結果をもとに, 自由記述とインタビューでの言及も含めて考察してきた。一部効果量が高くない項目もあったが, 自由記述を確認するとさまざまな重要な気づきをもたらしていた。また教育現場でリーダー村での学びが生きているとの言及も得られた。1泊2日を2週に分けて実施した短縮型のプログラムではあったが十分学生の資質能力の育成に貢献できていることが明らかになった。

3-2-3. 2022年度リーダー村参加学生への事前事後質問紙調査の結果

2022年度リーダー村については, 事前事後質問紙調査を完遂した対象者は15名で, 調査票の回収率は100%であった。内訳は, 3年生5名: 医学部看護学科5名, 1年生10名: 教育学部8名, 松山東雲女子大学人文科学部心理子ども学科2名であった。1年生が多い傾向が伺える。

各項目の平均値と標準偏差は表4の通りである。全項目において, 事前事後の得点に $p < 0.5$ の有意差が認められ, 平均値が増加していた。また, 効果量(r)の値についても, 全項目0.65以上で効果量大を示していた。

3-2-4. 2022年度リーダー村の成果の考察

以下, 事前事後調査結果をもとに, 自由記述とインタビューでの言及も踏まえながら2022年度リーダー村の成果を考察していく。

比較的效果量が低い項目であっても効果量大であり, 項目「7. 不明な点や困ったことがあれば, 企画者(地域の方々や, 職員, 教員)に適切に質問や相談ができる」でも $r=0.65$, 「11. 情報モラルを守り, 必要に応じてICTを活用することができる」でも $r=0.69$ であった。他の項目は0.81以上の非常に高い効果量を示している。

子どもと関わる体験村が2泊3日となったこと, リー

ダー村が体験村と連続の5泊6日となったこと, 参加者の多くが1年生であったことなども影響しているかもしれないが, 量的データを確認するだけでも非常に学生の資質能力の育成に貢献できていることがわかる。

<最も事後の値の平均が大きくなっている項目>

最も事後の値の平均が大きくなっているのは, 項目「6. プログラムの遂行を目指し, チームメンバーと協調することができる」と, 項目「9. 子どもの興味・関心・意欲を意識して, 子ども一人一人の活動を支援することができる」の4.9であった。これは効果量についてもそれぞれ $r=0.86$ と0.89という高い値であった。自由記述やインタビューでもこの2項目については以下のように言及されている。

- ・ チームで協力することの大切さを心から実感することができました。今まで言葉では何度も口にしていたけれどその意味の本当の大切さを理解することができました。ほかの大学生メンバーと助け合いながら活動することで, 子供たちに良い思い出を作ることができたと思います。(Bさん, 子1)
- ・ 協調することの重要性を実感した。一からの企画はひとりでは絶対に成功させることができなかった。目標にあげていた子どもの興味を引くような工夫を見事に達成できて本当にうれしく思う。(Eさん, 看3)
- ・ 「お城あんまり興味ない, って子もいたんですが, お城に興味はなくてもクイズは好きということがあって, クイズ形式の活動にして楽しんでもらえてたからそれはよかったと思います。」(Iさん, 教1)

教員を目指す学生が, メンバーとの協調といった協働的な学びを通して獲得できるであろう力や, 子ども一人一人の興味・関心・意欲に寄り沿う個別最適な学びを支援する力といった「令和の日本型学校教育」において求められる資質能力を身につけられたと強く感じられていることは, リーダー村での非常に大きな成果として捉えることができる。

<事後に値が最も大きく変化した項目>

事後に値が最も大きく変化した項目は, 「5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる」であった(事前3.2, 事後4.7)。また「12. 施設の職員や地域の人々から学んだことを活かしてプログラムを企画することができる」も事前の値は小さくなっている(事前3.4, 事後4.7)。

これらの項目の事前の値が小さいのは, リーダー村で初めて学生自身でプログラムを計画する機会を得られたことに関係するかもしれない。自由記述やインタビューからは, 時間や場所, 人数のことなど頭に入れながら, 何をすればいいのかを考えたり, 学んだことを子どもたちに提供する際どのように工夫すればよいか学べたとの言及が多くあっ

た。こうした力を高めるためにも、これからも学生自身でプログラムを計画する機会を提供していきたい。

<効果量の値が非常に高かった項目>

項目「4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる」については、事後の値の平均が4.8で効果量大 ($r=0.88$) となっている。

自由記述やインタビューでも、リフレクションの有用性の実感についての言及は多くあった。

- ・リーダー村での活動を通して活動した後に振り返りをし、改善することの大切さを学びました。リフレクションタイムで自分の意見、班のメンバーの意見を聞いてどうすればよりよいものになるのか考えることで、自然と次にその状況に陥った時に適切な対応をすることができるようになったと感じました。(Bさん、子1)
- ・「ふりかえりがなかったら、ここまでうまくできていないと思います。僕自身でもふりかえりの時間以外にもいろんな時に話し合ったり、弱音はいたりしましたが、ふりかえりの時間があったからこそ、次の日さらに一歩進んだ自分になれると思うし、一日一日で絶対ふりかえりは必要だと思います。自分一人でのふりかえりもですけど、それをもとに他の人と意見を共有するというのは成長につながるし、自分が失敗したと思っていたことも班で共有してみたら実はいいことだったと思えたこともあったし、ふりかえりは絶対したほうがいいと思います」(Iさん、教1)
- ・「リフレクションの時に、班の他のメンバーの子どもたちへの向き合い方とか意識の高さに強く刺激されました。リフレクションがないと気付けないし、自分の成長も確かめられなかった。次こうしようと思って実際にできたという達成感もリフレクションがあったからだと思う。」(Kさん、教1)

リーダー村では毎晩40分程度リフレクション・タイムを行っているが、学生はそれぞれ適切に省察し行動計画を立てることができていた。そうしたことがこの値に現れており、教員から見ても妥当な値となっていると考える。「学び続ける教師」として不可欠なリフレクションの力の育成にリーダー村は貢献できていると捉えられる。

項目「1. 子どもの育成を支援する教育の指導者に求められる役割について、具体的に述べるができる」についても効果量大 ($r=0.88$) であった。

学生たちは事前に子どもの成長を支援するリーダーについての講話を遠隔非同期型で受講しているが、以下の自由記述とインタビューからも分かるように、リーダー村を通して子どもと関わり、掴めたものがあるのであろう。

- ・「小学校中学校までは先生のイメージは引っ張っていく人でした。やっぱり前に立って導いてくれるというイメージがすごく強かったんですけど、この活動で、一歩下がったところから見るという時と、引っ張るという時と使い分けているということを知りました」(Iさん、教1)
- ・私が今回のリーダー村で感じ学んだのは、「リーダーだから完璧にしなくてはいけません」、「リーダーだから頑張らないと」と。リーダーがすべてを背負いすべてにおいて上に立つのは違うんだなということです。(Hさん、子1)

項目「3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる」についても効果量大 ($r=0.88$) であった。

- ・「学校だけで、こういう規模の体験は子どもたちにさせられないと思いました。地域との協力は絶対に必要だと思いました。」(Iさん、教1)
- ・チームで連携協働することの大切さをとても感じた。違う視点を知り自分に活かせる。(Gさん、看3)
- ・「私は子どもが馴染めてるかな、とかへの意識だけでしたけど、看護の方は、ここが危なかったとか、顔色が悪い、体調が悪いとかすぐ気づいてすごいなと思った。そういうところを見ないといけないということとかとても勉強になった」(Kさん、教1)
- ・「子ども学科の人たちは、一緒にやろうよというアプローチで子どもとすぐ打ち解けてすごいなと思いました。子どもとの向き合い方とか本当に参考になりました。違う勉強をしている人たちと一緒にやれてとても勉強になりました。世界が広がりました。」(Iさん、教1)

このように専門を超えた連携・協働についても、学生たちは国立大洲青少年交流の家の職員間の連携や、博物館学芸員、カヌー指導やキャンドルサービス指導の地域の方々との協働を目の当たりにして、チームとして組織内外の人々と連携・協働していく重要性を掴み取ったのではないかと考える。また、自由記述やインタビューからも伺えるように専門の違う学生同士で協力しあう経験を通して、連携・協働の重要性を確認できたと捉えられる。

項目「8. 子どもの成長を支援するための体験活動を安全かつ効果的に指導することができる」についても効果量大 ($r=0.87$) であった。安全確保の視点を持ちながら体験活動の指導ができると意識できていることが以下インタビューからも確認できる。

- ・「熱中症についてはとても気をつけていました。カヌーの時に楽しくなったり疲れたりして水分補給を忘れてし

まいそうだったので、みんなで声がけしながら飲ませていくのが大切だと思いきれができました。(Jさん, 教1)

- ・「野外炊飯の時にやっぱり火があるので、積極的に張り切りすぎる子について安全に気をつけることができました」(Kさん, 教1)

安全確保については、熱中症や怪我の防止はもちろん、手洗いや消毒、黙食や黙浴、検温や体調確認といった新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための対策を、子どもたちに指導する力も育成する機会となっていたと考えられる。

< 2021 年度調査と大きく傾向が違う項目 >

項目「2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる」については効果量大 ($r=0.81$) であった。この項目は、2021 年度リーダー村の事前事後調査結果では、有意差は見られず、効果量中であった (表3)。しかし、子どもと関わる時間が2泊3日となった2022年度リーダー村では有意差があり平均値が大きく増加、効果量も大であった。このことから子どもと適切なコミュニケーションがとる力が身についたと思えるには、2泊3日程度は子どもと関わる時間が必要であるのかもしれない。

< 最も事後の値の平均が小さかった項目 >

全項目で事後の値の平均が最も少なく (4.1)、効果量大といえども値が小さかった ($r=0.69$) のは、「11. 情報モラルを守り、必要に応じて ICT を活用することができる」であった。

2021 年度は、Zoom を活用した学生同士の話し合いやリフレクションなどでの積極的な活用があった。2022 年度では、大洲市立博物館学芸員の方が LINE オープンチャットの機能を活用し、学生各人のスマートフォンで昔の写真を閲覧しながら大洲城周辺のフィールドワークを行うなど、ICT の有効な活用方法について学ぶ機会を提供してくださった。学生のインタビューで以下の通り言及されているように、プログラム運営での LINE の活用や、事前説明会での Zoom の活用など、学生は ICT の活用について具体的なイメージを掴めたと考えていると捉えられる。

- ・「ウォークラリーの進行状況の把握を LINE でやりました。LINE で連絡を取り合って、今ここの終わったよ、と活用しました。また授業で Zoom での同期型のものを受けたことがなかったので、説明を聞くだけでなく、質問できたりして、こういうアプリが使えるんだということを知って勉強になりました。」(Iさん, 教1)

ICT の活用能力についても学生がより身につけられる

ように仕掛けを考えていきたい。

< 12 項目以外に学生が獲得した成果 >

その他、12 の項目とは別に、リーダー村での活動を通して学生が獲得できた成果と思われる記述や言及を以下に挙げる。子どもと関わる意欲、挑戦への意欲、教師のやりがいへの気づき、将来の目標の獲得、今後の大学生活の指針の獲得、体験学習の重要性の認識、宿泊型教育体験活動の意義など、学生は数多くの成果を獲得してくれている。

- ・今回濃密な6日間の中で得たものは多すぎるが、一番はやっぱり目の前の子供とまっすぐ向き合い褒めてあげると目に見えて子供は成長して行くんだと実感した。こんな私たちをリーダーとして頼ってくれて、自分自身の自信にも直結したし、子どもの潜在能力からたくさんのごとを学ばせてもらった。本当に本当に参加して良かった。今までは躊躇しがちな部分もあったが今回とにかく何でも挑戦してみることを意識すると新しい扉を開けた気がした。これからも積極的に何事にも取り組んでいきたい。(Eさん, 看3)
- ・子どもは自分が思っている以上に心が豊かであると気付くとともに、その未知の、子どもたちとの関わり方を手探りで探し続けることは難しいようで、実はそれが教師の一番の醍醐味、やりがいなのではないかと考えました。(Aさん, 教1)
- ・自分は、子ども関連の仕事に就きたいという大まかな目標しかなかったけれど、この活動を通して、一番子供達と関わる事のできる幼稚園教諭になりたいという夢を持つことができました。(Bさん, 子1)
- ・同じ教師を目指す仲間と考えを共有したり、観察して良いところを盗んだり、互いに刺激しあって活動できたことも、今後の大学生活での活動の取り組み方の指針を見つけることにも繋がりました。(Aさん, 教1)
- ・「「体験大事だよ」と事前の講義動画で話されていて、確かにそうだなって思ってたんですけど、それを本当に実感しました。これだけいろんなことを考えながら5泊6日過ごして、本当に五感で学べる教材に囲まれていたと思います。準備期間で自分たちが経験して、小学生たちが来て、自分達もそこで経験しながら小学生にも経験させてみたいな、これに参加していろんなことを見ながら経験しながらいろんなことに気づけたってこの5泊6日を経験できたのが自信になっています。」(Tさん, 教1)

以上事前事後調査結果をもとに、自由記述とインタビューでの言及も踏まえながら2022年度リーダー村の成果を考察してきた。

統計分析の量的データを確認するだけでも、全ての項目

の効果量の高さから、学生の資質能力の育成に十分貢献できていることがわかる。自由記述やインタビューといった質的データからも、それを裏付けることができた。

中央教育審議会（2015）これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）。

中央教育審議会答申（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）。

4. おわりに

本稿では、with コロナ時代における学生宿泊型教育体験活動への視点を提示すべく、以上のように、リーダー村での取り組みを紹介しながら、その成果を明らかにしてきた。

リーダー村は「学び伝える」をコンセプトとし、「これからの教員に求められる資質能力」を育成することを目指す宿泊型教育体験活動であった。

with コロナ時代においても、活動内容の精選による日程の短縮、宿泊場所、活動場所の限定、2週間前からの健康観察の実施、大学マイクロバスの活用、ICTの活用、新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインの遵守など、新型コロナウイルス感染症対策をできる限り行い活動を継続していた。

成果としても、事前事後アンケートという量的データ、自由記述とインタビューという質的データの分析から、学生の「これからの教員に求められる資質能力」の育成に十分貢献できていることが明らかとなった。また、学生たちはその他にも、子どもと関わる意欲、挑戦への意欲、教師のやりがいへの気づき、将来の目標の獲得、今後の大学生生活の指針の獲得、体験学習の重要性の認識、宿泊型教育体験活動の意義など、数多くの成果を獲得していた。

新型コロナウイルス感染拡大のために1年休止せざるを得なかったからこそ、学生の体験からの学習は極めて重要であると改めて認識する。とくに教員を目指す学生にとっては、子どもと関わる体験からの学習は重要であると考えられる。行っていなければこれらの成果は得られない。

リーダー村のような学生宿泊型教育体験活動を実施することによって、学生の実感を生み、「これからの教員に求められる資質能力」というものを十分に育成することができる。また、その他多くの学びも得ることができると考えられる。

今後も新型コロナウイルス感染症対策をできる限り行い、改善しながら継続し、より学生の資質能力の育成に貢献できる活動にしていきたい。

引用文献

- 高橋平徳、日野克博、山崎哲司（2017）教員に求められる資質能力と教員養成。愛媛大学教育学部紀要，64，149-155。
- 水本篤、竹内理（2008）研究論文における効果量の報告のために－基礎的概念と注意点－。英語教育研究，31，57-66。
- 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）教職課程コアカリキュラム。

